

平松健

はじめに

2008年6月の新聞発表に続く考古学協会総会での歴史民俗博物館（以下歴博という）の発表で、はっきり箸墓古墳が卑弥呼の墓と推定できるような報告を行い、翌年6月にも同じように新聞発表をした後で、歴博が同じ考古学協会総会で今度は自信に満ちた表現で卑弥呼の墓であると報告した。先駆けて新聞発表を行い、その後あたかも通説であるかのような世論操作を行うことは学問の発展のためには誠に嘆かわしいことであるが、通説に敢然と立ち向かわれる安本先生を仰ぎ見つつ、従来から通説と無縁である筆者は、通説に惑わされることなく、今まで言ってきたことや書いてきたことをまとめてみたい。

I 箸墓＝卑弥呼の墓肯定説

1 従前の学説

伝承としては、日本書紀では10代崇神天皇の時代にいた「倭迹迹日百襲姫」（やまとととひももそひめ）の墓とされている。彼女は8代孝元天皇の娘と伝えられ、大物主神の妻となるが、大神の実態を見て、大神に恥をかかせたことを後悔し、箸で女陰を突いて死ぬ。葬った墓を箸墓という、とある。日本書紀の設定では卑弥呼は神功皇后であるから、卑弥呼の墓ではないことになるが、古くから倭迹迹日百襲姫を卑弥呼に擬する説もあり、従って卑弥呼の墓とする説があったようである。ただし延喜式には箸墓ないし、大市の名前は見え、延宝9年（1681）の林宗甫の「和州旧跡幽考」にはじめて箸墓の記述が見える（和田萃氏「体系日本の歴史」1988）。因みに宮内庁書陵部はモモソヒメの大市墓として管理している。

これを学問的に発表したのは笠井新也（卑弥呼即ち倭迹迹日百襲姫＝考古学雑誌14-7、1924及び卑弥呼の冢墓と箸墓＝考古学雑誌32-7、1942）が最初である。彼は、卑弥呼は倭迹迹日百襲姫であり、箸墓は卑弥呼の墓であるとする趣旨の論文を相次いで発表した。肥後和男氏、和歌森太郎氏、原田大六氏（卑弥呼の墓）など、笠井新也氏の説をうけついで。

彼の議論の根拠は、

- ① 箸墓は、『日本書紀』に記されているとおり、倭迹迹日百襲姫の墓であり、倭迹迹日百襲姫は、崇神天皇の時代の人である。
- ② 『古事記』記載の崇神天皇の没年干支（戊寅の年）をもとに、崇神天皇の没年を二五八年であるとし、卑弥呼が没したのは、二四八年ごろと考えられるので、崇神天皇の時代は、ほぼ、卑弥呼の時代である。
- ③ よって、卑弥呼の時代と、倭迹迹日百襲姫の時代とは重なりあい、この二人は、同一人物で、倭迹迹日百襲姫の箸墓は、卑弥呼の墓である、というにある。

戦後、この時代の暦年を二連繰り下げるのが一般化された後も、逆に古墳の年代を百年ほど繰り上げる説が一般化され、箸墓＝卑弥呼の墓説が根強い支持を持っている。参考までに古墳の年代を百年も繰り上げるのには抵抗のある方々は、箸墓＝壹与の墓ということで妥協点を見ているようである（石野博信氏、和田萃氏、寺澤薫氏等）。

2 最近の学説

近年は西谷正氏、白石太一郎氏らが卑弥呼の墓であると積極的に主張し、両氏が考古学会の重鎮であることから、特に考古学者関係の多くの賛同者を得ている（春成秀爾、杉山晋作、奥田尚他「箸墓古墳の再検討」歴博研究報告3）。

このうち西谷氏は、講演等でははっきり箸墓古墳は卑弥呼の墓であるとしながら、『魏志倭人伝の考古学』（2009年4月30日学生社）にはそのことを明記していない。一方、白石氏は「箸墓周辺から出土する土器の実年代は、3世紀半ばすぎから後半とみられ、卑弥呼の墓の可能性もある。」（1998年9月11日奈良新聞）から「箸墓古墳が最初の倭国王である卑弥呼の墓である可能性が極めて大きいと考えている。」（『倭国誕生』2002）に変化し、2009年6月朝日カルチャー横浜講演では「卑弥呼の墓に間違いはないと考える」となっている。

考古学者の根拠とするところは、大同小異はあるが基本的には、①箸墓古墳が大型古墳の最初である、②大型古墳は強大権力を持つ王権が成立する時と考えられる、③歴史書ではそれは卑弥呼に代表される邪馬台国である、④一方土器編年、埴輪編年、漢鏡編年等から、箸墓古墳は3世紀中頃と考えられ、それは卑弥呼の死亡した時期に該当する、よって箸墓古墳は卑弥呼の墓である、というにある。

直近では前述のように、春成氏を中心とする歴博の学者が炭素14年代測定法により、箸墓古墳の年代を西暦240年から260年までの間に特定して箸墓古墳卑弥呼の墓説を強力に展開している。

II 否定説

1 考古学的観点からの否定説（箸墓が3世紀半ばにならない論拠）

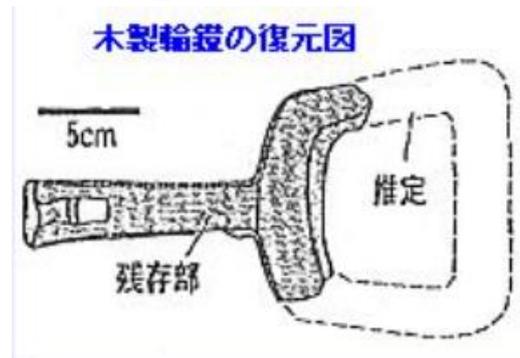
① 馬具の出現

ア 2001年12月1日付読売、毎日、日経＝11月30日櫻井市教育委員会発表

「箸墓古墳周濠跡から古墳時代前期（3世紀末～4世紀初め）の木製輪鏡（わあぶみ）が出土した。

馬具としては国内最古で現存する鏡では世界最古と見られる。我が国の乗馬の始まりを100年近く遡らせる発見で、4世紀後半から5世紀初め頃に朝鮮半島に対抗するため導入したとされる通説は見直しを迫られることになりそうだ。

（中略）鏡は西晋（265－316）の中国で発明されたとする。中国遼寧省・朝陽袁台子墓（4世紀前半）出土の鏡がこれまで現存品としては世界最古だった。また国内最古の馬具は福岡市・老司古墳（4世紀後半）から出土した鉄製の轡などだった」（読売）。この新聞記事（それを流した背後の学者の意図）は鏡の出現によって箸墓古墳の時代が4世紀後半にされることを警戒して、予防線を張ったものと見られる。



イ 問題点

- i 倭人伝には「其地無牛馬虎豹羊鵲」とあり、牛馬はいなかった。
- ii 中国には何十倍もの馬がいたはずであるのに、馬具が日本の方で先にでる根拠に乏しい。
- iii 上述のように「邪馬台国近畿にありき」説に押されて発表されている可能性が極めて高い。

ウ 土器と輪鏡の関係

新聞報道では鏡は4世紀初めの大量の土器（布留1式）と共に出たとする。発表者自ら鏡は4世紀以降ということを知っている筈である。

関川尚功氏は布留1式を4世紀の中頃とみる。

箸墓古墳や布留1式の年代を固定して馬具の年代を繰り上げて行くよりも、箸墓古墳や布留1式を繰り下げの方が自然である（安本美典氏）

エ 出土地点

馬具については、考古学者は関川氏に限らず4世紀後半以降に日本に渡ってきたと考えており、この点の弱点を避けるために、出土地点の説明を変えているフシが見られる。すなわち、当初布留1式土器と共伴したと言っていたが、別の考古学者に確認したところ、周濠の堆積土の中頃から出てきたと聞いていると言っている。箸墓古墳を論じる時に馬具のことは無視するよう申し合わせているかのように感じる。（筆者）

② 築造の時期

石野博信氏 箸墓は3世紀の後半であり卑弥呼の墓ではないとする。（邪馬台国の考古学）

川西宏幸氏 箸墓古墳と崇神天皇陵を360～400年頃とする。

和田萃氏 4世紀初頭とする。『体系日本の歴史』

斎藤忠氏 崇神天皇陵は4世紀中頃＝崇神天皇の実在は4世紀中頃『古代学13巻1号』とし、箸墓古墳もこのころとする。

安本美典氏 「日本古代遺跡事典」では「崇神天皇10年の記事に日は人が作り、夜は神が作った。大阪山から人々が並んで手送りで石を運んだ、説話が記録されている。このことから崇神天皇の時代に築造されたと考えるのが自然とする。

関川尚功氏 箸墓の築造を350年前後とする(前述) その理由として

- a 箸墓の後円部から特殊埴輪、前方部から坪型土器が出土している。
- b 箸墓のような二重口縁壺は布留式の前の段階の庄内式には見あたらない。
- c 特殊埴輪も箸墓より時期的にさかのぼると思われるものが大和の弁天塚で出土しているが布留式の壺も共伴している。
- d 大型前方後円墳の出現は布留式初期と一致している。

以上により箸墓を庄内期にさかのぼらせることは難しい。(季刊邪馬台国42)

(注 この時点では、箸墓=卑弥呼の墓説は庄内式を遡らせることにより箸墓の年代を早めようという手法であったが、現在では庄内の後に布留0式を入れてそれを遡らせようという方式に変わっている)。

③ 三角縁神獣鏡との関係

福永伸也氏 三角縁神獣鏡の最終製作年代を300年前後とすることから、古墳の出現年代を三世紀後半でもあまり古い時代まではさかのぼれないとする。(古墳時代の考古学)

④ 形態の問題

椿井大塚山古墳は撥型に開いている。しかしここから出てくる土器からは4世紀中期から後半のものである。箸墓をこの時代よりあまり遡ることはできない(東南アジアの古代文化52)

福永伸也氏 卑弥呼が死んだ後も何時までも政権が続くことを示すために前方後円墳を考案した(2008年東京国立博物館での講演)。福永氏は内心箸墓を卑弥呼の墓としたいようであるが、上述の三角縁神獣鏡理論との関係で無理がある。

⑤ 特殊器台形埴輪の問題

通常特殊器台形埴輪が出れば古いとされるが、箸墓には古い形式のものと新しい形式のものがある。大和で円筒埴輪の制作が開始されたのは極めて短い期間である。(関川尚功)

特殊器台形埴輪を出土した古墳は垂仁天皇陵古墳に形態が類似する。360~370年頃と思われる。(安本美典氏)

⑥ 土器編年の問題

ア 石野博信氏の考え方(2008年講演)

布留式はかなり定型化した土器であり畿内一円で出土する。初期国家成立後前方後円墳が全国的に広がる時期に対応する。

布留式土器について確たる実年代を推定する根拠は直接的にはない。客観的年代が定まるのは最後の段階の須恵器のみである。土器から時期を決定しようとするならその最終末に出現する須恵器の初現時期を手がかりにせざるを得ない。

布留式の編年については3ないし4形式に分類されその終末期に須恵器の出現を見ることは異論ない。

須恵器の専門家は大体5世紀の真ん中ぐらいに須恵器が出てくるとする。

布留式を3ないし4つに分けて庄内式は4世紀真ん中ぐらいであり、その前の纏向はせいぜい300年ごろと思われる。

イ 森浩一

北九州から遠ざかるに従って年数を増やす必要がある(3世紀の考古学)。

⑤ 考古学上の否定説のまとめ

箸墓古墳の築造時期は3世紀中頃までは遡らない。4世紀中頃と考えるのが正当である。従って卑弥呼の墓ではあり得ない。

2 文献学上から見た否定説

① 邪馬台国九州説

邪馬台国九州説の人は当然のことながら、地理的根拠から卑弥呼の墓であることを否定する。

文献を忠実に読めば当然に邪馬台(壹)国は九州にあり、従って卑弥呼の墓は九州しか考えられない。

② 古田説

ア 問題の原点

魏志倭人伝には「卑彌呼以死、大作冢、徑百餘歩」とあることから、卑彌呼の時代の徑百歩の大古墳は箸墓であると短絡的に結びつける点にある。

イ 百歩の長さの問題

i 周髀算経

魏の時代の里・歩の長さを論じるには『周髀算経』を避けて通ることはできない。『周髀算経』については能田忠亮博士が東洋天文学史論叢（昭和18年12月28日）で詳しいが、これを、短里と結びつけて研究したのは谷本茂氏が初めてである。

『周髀算経』は周の時代(西周は BC1050年～BC771年)に行なわれた天文観測の方法を記載する中国最古の天文算術書であるといわれている。中国の古代の算術書は、いわゆる算経十書として版本が伝わっており、その中でも、『周髀算経』『九章算術』『海島算経』などは漢から三国時代(二～三世紀)にかけて整理され、教科書として使用されていた。

『周髀算経』という書物としての成立時期は、だいたい三世紀初め頃と思われる。初めて注釈した趙君卿という人が、「漢」の趙君卿と記しており、その注に引用されている書物のなかで、後漢の劉洪の作といわれる『乾象歴』(二〇六年頃)が最も新しいことから、趙君卿が注釈整理したのは、二〇六年から二二〇年(後漢末)の間の時期ということが分かる。『漢書』芸文志には『周髀算経』の名は見られないので、前漢以前には現存のような形では知られていなかった。

もっともインターネットで検索すると公元前100年ごろ、前漢の時代と書かれている。『周髀算経』の本文は、同時代のことから後漢時代の暦にまで言及している。明らかに同一時代に同一人の手によって成立したとは思われない文面があり、多くの部分で趙君卿自ら、これらは周髀の本文にあらずと注記している。

前述の能田忠亮博士によれば、天文学的にみて、BC12世紀前後百年ばかりの間においてのみ観測しえる天象や、春秋時代中期以降戦国時代初期の間(BC6世紀～BC5世紀)に起源をもつとみられる内容のものがある反面、後世後漢時代の知識も多分に含まれている。

要するに、『周髀算経』は、この書の中にある概念や方法の起源は相当古く、周時代以来伝承されてきた種々の天文算術知識を集成したものであり、それを後漢末頃に、最初の注釈者趙君卿により現存のような形に整理されたとみて大過ないと思われる。(科学の名著シリーズ『中国天文学・数学集』朝日出版社刊)

ii 周髀算経の評価

中国の学者は本書の成立の年代をBC100年ごろとしている。ちょうど武帝の太初元年(前104年)に改暦があり、その際、前漢の里の長さを405 $\frac{1}{2}$ ととして計算するため、周髀算経の計算は誤りであるとされた。又現代の学者も、周髀算経にある勾股の法(ピタゴラスの定理)がピタゴラスより独立して発見されたということに関心があるだけであり、これから計算される地球の大きさや太陽までの距離などおよそ実際の数値とはほど遠いことから、単に歴法と天文学史としての位置づけしか与えず、「里」については全く関心がない。例えば呂應鐘氏(上海交通大学)も周髀算経は間違いであるといい(天文研究1965)、沈仁安教授も「里」については避けて通っている感じである。しかし里が76 $\frac{1}{2}$ であることが解れば評価は一変するはずである。(中国の学者はそれを計算していない)。

iii 周髀算経の使われていた時点

古田武彦氏は蜀志諸葛亮傳の「諸葛氏集目録と上表」の文章より、魏の諸制度を夏・殷・周に復帰することを謳っていることを挙げる。また廃止が晋書元帝記に出てくるから、西晋時代に使用されていた証拠にもなる。

iv 周髀算経の重要な記載

a 以為句。廣三。股修四。徑隅五。

句(コウ=勾の本字)とは直角三角形の短い辺、股とは長い辺、直角に対する辺を弦という。意味は、勾の長さを3とし、股の長さを4とすれば両端を結ぶ差し渡しは5になる、ということで、いわゆるピタゴラスの定理を、ピタゴラス(BC570年頃)より早く発見していることになるが、中国の学者はあまり吹聴しない。(公元前100年頃とする関係からか)

b 周髀長八尺。夏至之日晷(キ=ひかげ)一尺六寸。正南千里。句一尺五寸。正北千里。句一尺七寸。

いわゆる一寸千里の法である。谷本茂氏は、南へ千里離れる所では一尺五寸になり、北へ千里離れる

所では一尺七寸になるという。

c 日夏至南萬六千里。日中無影。

周の陽城から南へ一万六千里行くと夏至の時に太陽の影の長さがゼロになり（北回帰線上）、同じ時陽城では八尺の竿の陰が一尺六寸になるということ。地球の周囲が4萬キロであることから、1万6千里は何キロか比例計算して簡単に約78米という数値を得る。数学的には谷本氏の方式が正しいが、この方式は、その昔エラトステネス（BC275～BC195）がアレクサンドリアからシエーネ（北回帰線上）までの距離から地球の周りを計算したのとちょうど反対の方式である。

d 三分里之一。即為百歩

即ち百歩は三分の一里ということである。

一里は76^歩前後であるから、三分の一里は25^歩余り、百余歩は30^歩前後となる。

ウ 箸墓古墳は主軸全長275^歩、後円部径150^歩、高さ29.4^歩、前方部幅128^歩高さ16^歩と巨大である。（古墳辞典）。漢代の一里は405^歩であるから百歩は135^歩、百余里を150^歩とすれば、箸墓古墳卑弥呼の墓説が後円部だけの長さであろうという限定をつけなければならないが、全く不自然である。

万一魏の国で短里が適用されていないという立場にたっても、三国志に出てくる東夷伝の世界は確実に短里が適用されているわけであり、東夷伝に出てくる里は現実に測定できる里であり、平均すれば約90^歩になる。この場合も百歩は30^歩であり、百余里は35^里程度であろう。箸墓の大きさに遠く及ばない。

エ 冢の大きさ。

i 倭人伝の記載は「大作冢」であり「作大冢」ではない。大いに冢を作ったのであり、大いなる冢を作ったのではない。

ii さらに「亮遺命葬漢中定軍山、因山爲墳、冢足容棺（蜀書諸葛亮傳第五）」となっており、棺を入れるのに十分なものが冢であり、冢は墳より小さい物という認識である。諸葛亮を尊敬する陳寿は当然墳と冢の違いを認識して書いているはずで、もし陳寿が箸墓を見ていたとしたら、「作大墳」と書いた筈である。

オ 徑について

諸橋大漢和辞典では徑の多くの意味の内⑩として「さしわたし」とし、円形・球形の直径としている。さらにたまたま例文として「周髀算經上」をあげ、此夏正日路之徑也（注）其徑者円中之直者也を引用している。要するにこの場合の冢は円形であって、前方後円墳ではない。この点からも箸墓は該当しない。

カ 薄葬について

魏の文帝は黄初三年（222）自ら慎ましやかな寿陵を造り、「夫葬也者、藏也、欲人之不得見也。（中略）爲棺槨足以朽骨、衣衾足以朽肉而已」と言っている。文帝を継いだ明帝も漢代の帝王には表敬するも、自分の墓については薄葬とした。このような時代に朝貢したり、魏の権威を借りて匈奴国に圧力をかけようとしていた（正始8年）卑弥呼の時代や、その後の壹与の時代に大々的な古墳を作ることは考えられない。

キ 以死の解釈

原文は「卑弥呼以死、大作冢」となっており、通常は「卑弥呼以て死す、大いに冢を作る」と解釈しているが、「以て死す」という言葉の意味に苦労している。これは「卑弥呼死を以て大いに冢を作る」と解釈すべきものである。因みに内藤博士は「すでに死す」と読んでいるが（岩波文庫）、意味としては同じである。

このことは今般歴博の春成氏が発表した「寿陵である可能性がある」ということを完全に否定するものである。生前ではなく死後に冢を作ったことは明白である。

ク 槨の問題

倭人伝には「其死、有棺無槨、封土作冢」とある。ところが箸墓古墳より一世代前であるとされるホケノ山古墳で槨が発見された。もっとも発掘指導者の石野博信氏は中国の槨に比べれば非常に小さいと言うが、明らかに棺を覆う槨室の跡がある。それより時代が下り、大きさも格段に大きくなった箸墓古墳は発掘されていないから断定はできないが、常識的には大きな槨があるはずである。そうすると有棺

無柳という倭人伝の記述と矛盾する。この面からも卑弥呼の墓であることが否定される。

②-2 古田説要点

- ⑦ 魏志倭人伝の記事は「大作冢、徑百餘歩」である。「大作冢」は「作冢」ではない。大いに冢を作ったのであり、大いなる冢を作ったのではない。
- ⑧ 冢とは、「因山為墳、冢足容棺」（三国志諸葛亮伝）とある。諸橋は「墳冢足容棺」と続けているが、中華書局版では因山為墳、冢足容棺である。ただし説文では「墳者墓也、墓之高者、曰冢」とあり、墳と冢は同義である。
- ⑨ 徑とは「徑者、圓中之直者也」（周髀算經上）とあり、円の直径である。前方後円墳では徑が当てはまらない。
- ⑩ 歩とは「三分里之一、即為百歩」（周髀算經上）とあり、百歩は三分の一里である。
- ⑪ 一方、里は「夏至南萬六千里…中略…日中立竿測影周髀長八尺、夏至之日晷一尺六寸（後略）」（周髀算經上）測定地陽城は北緯約35度、夏至は23.5度（のところに太陽が来るから。であるから）緯度差は11.5度、概算で見て1里=40000（=地球一周、キロメートル）x 11.5 / 360 / 16000 = 79.8メートルであり、百余歩は約27メートルである。（マイナスタンゼントを用いて一里=76メートルとした、谷本茂氏の難しい数式を必要としない。ただし古田氏は谷本説を採用）。

III 倭弥呼の墓 比定諸説

1 平原王墓説（安本説）

① 概説

卑弥呼の墓=箸墓古墳説が次第に有力になる中、最近安本美典氏が『卑弥呼の墓は、すでに発掘されている！』（二〇一七年一月、勉強出版）で平原王墓説を展開されている。

氏は森浩一氏説を基本としながら、まず崇神天皇の没年干支戊寅二五八年説を検証批判し、倭弥呼の墓=平原王墓を採る奥野正男氏、高島忠平氏、柳田康雄氏（直接卑弥呼とは言っていないが）を支持し、平原王墓=天照大神の墓とする原田大六説を、自説の卑弥呼=天照大神に結びつけて平原王墓=倭弥呼の墓説に見事吸収展開する。もっとも前半の箸墓≠倭弥呼の墓については二〇一一年の段階で『倭弥呼の墓・宮殿を偽造するな！』（勉強出版）で詳しく検証している。

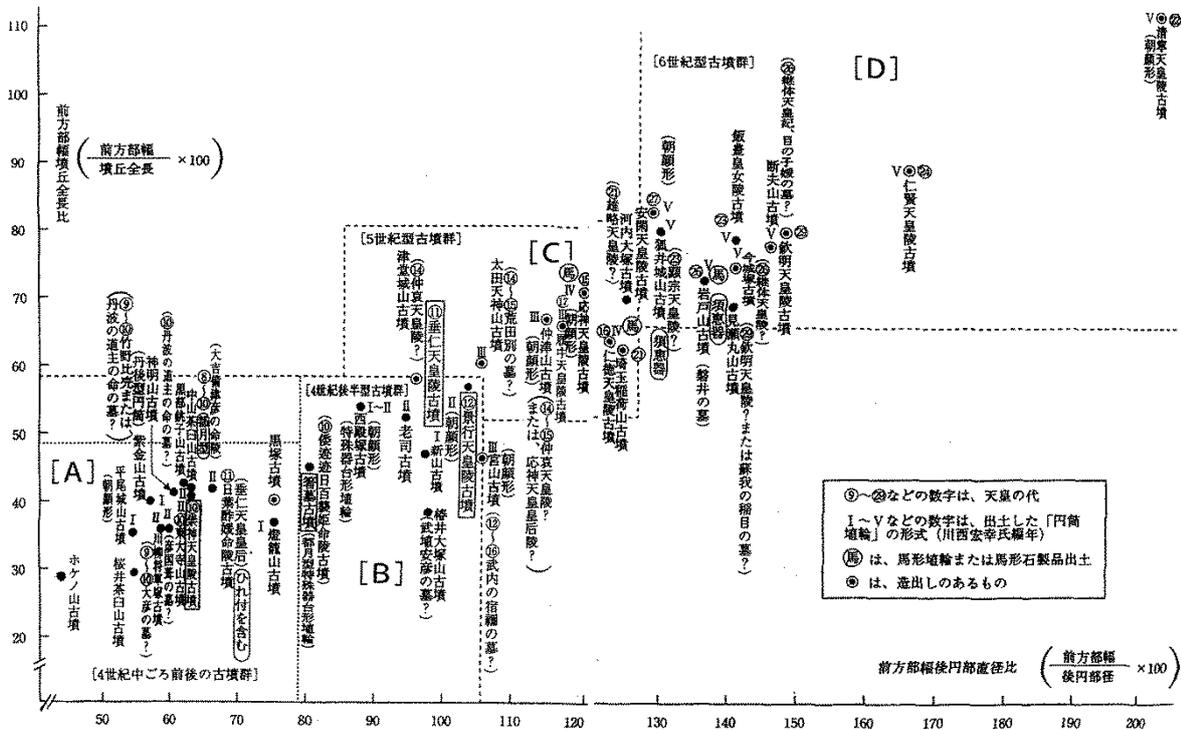


図11 前方後円墳の築造年代推定図

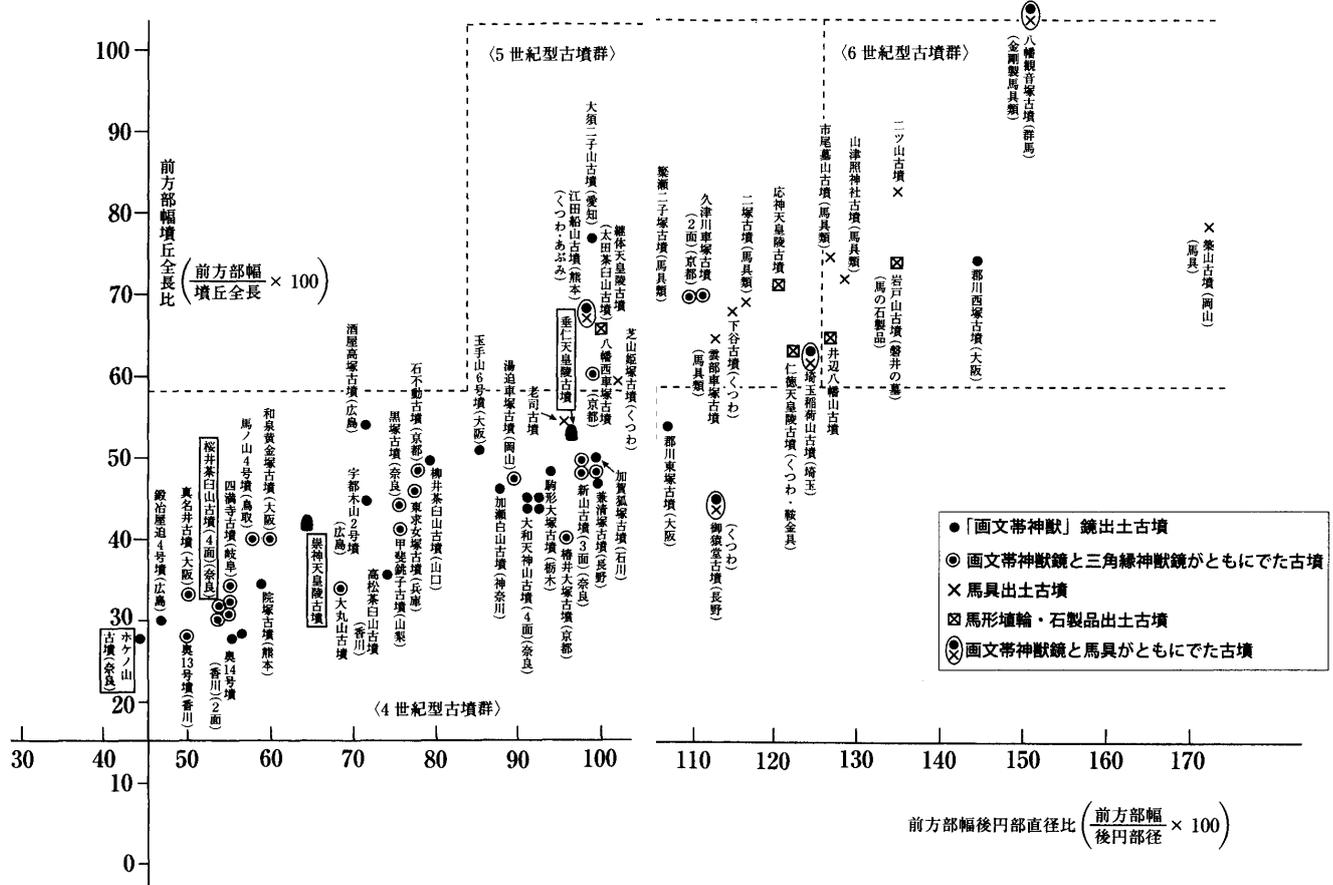
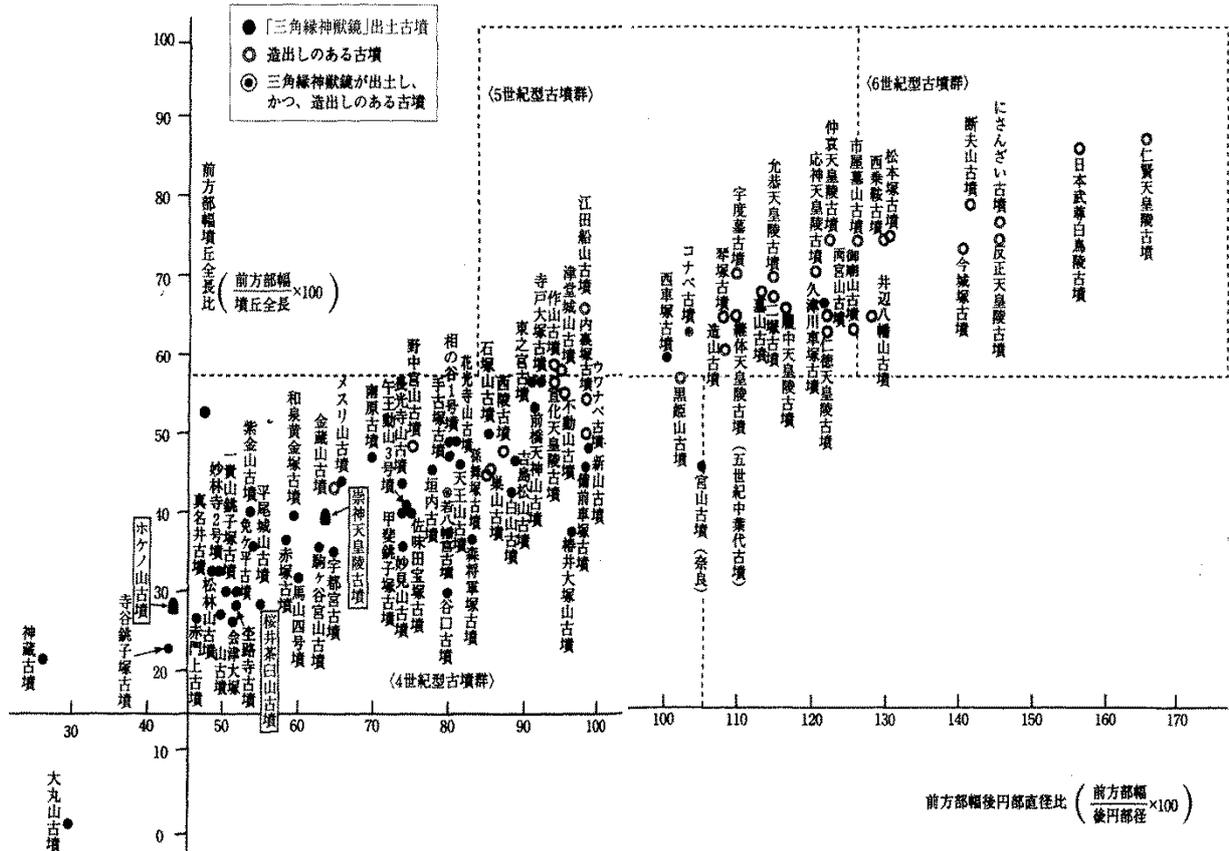


図13 「画文帯神獸鏡」出土古墳群と馬具類・馬形埴輪出土古墳群

